

岡崎むかし館

てつかぶと ぼうくうすきん 鉄兜・防空頭巾



岡崎むかし館蔵

この鉄兜は、^{へいたい}兵隊が^{せんち}戦地で着用したものではなくて、一般人(民間人)が^{ぼうくう}防空(航空機など空からの攻撃を防ぐ)用に使用した鉄製のヘルメットです。鉄兜や防空頭巾は、常に^{くうしゅう}空襲の危険がある戦時下の暮らしにおいて、空襲による^{ひらいぶつ}飛来物や^{らつかぶつ}落下物、そして火事などから頭部を守るために、身のまわりに常備していた道具です。空襲警報が^{けいほう}発令されると、みな鉄兜や防空頭巾をかぶり、とにかく^{たいひしょ}防空ごう(空襲から身を守るため、地面を掘って作った待避所)に^{ひなん}避難したりしました。

おもに防空頭巾は、女性や子どもたちに使われ、鉄兜は男性が着用していました。空襲が^{はげ}激しくなるにしたがい、頭と顔をつつむ長さであった防空頭巾も、肩までおおう長さとなり、綿もしっかり入ったものが多くなります。綿入りの頭巾は^{ぼくおん}爆音から耳を守る役割も果たします。ものが不足していた当時、^{ふるぎ}古着などを利用して作られ、子どもたちの防空頭巾には、けがを負った時の身元確認ができるように「住所・学校名・氏名・生年月日・血液型」などを記した布が^{ぬい}縫い^{つけ}付けられていました。

まさに鉄兜や防空頭巾は、命を守る道具として、戦時下の暮らしを象徴するものです。

<参考文献> 『戦争とくらしの事典』ポプラ社、2008年

『目で見える戦争とくらし百科4』日本図書センター、2001年